

連載

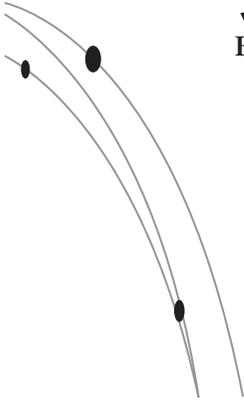
フィールド・アイ

Field Eye

広州から——①

暨南大学 丸山 士行

Shiko Maruyama



中国で教授になる

築三十年はくだらなさそうな、古びた3階建ての建物の入り口は円形の吹き抜けになっている。昼前11時半にもなると無数の群衆が吸い込まれていく。入り口の上には巨大な金色の文字飾りで「食堂」とあり、その下には赤い提灯が等間隔で飾られている。若い学生達に混ざって、教職員やその家族、制服姿の小学生達も見かける。私のお気に入りには3階だ。3階の奥から、具を選べる鍋コーナー、水餃子、手打ち麺、刀削麺、蒸しご飯、焼き物、燻製のおかず、最後のコーナーでは好きなおかずを選んで、広東風のみならず四川風の辛いおかずもある。1階2階はさらに選択肢が多く、ちまきや蒸しパン、大根モチなどの点心、甘いスープ、焼き餃子、おかゆ、釜飯、アラカルトコーナーなどがある。すべて日本で言うところの中華料理だ。「中華」でないものはかろうじて、ハンバーガー、フライドポテトとパンくらいのものか。私のイチ押しは釜飯でお焦げがたまらないのだが、目の前で米を炊き上げてくれるのでやたら待たされる。手延べ麺も目の前で麺を叩いていて結構いける。どれを選ぶにしても、行列に並び、窓越しに注文する。英語は微塵も通じない。喧噪と行列のプレッシャーで圧倒されそうになるが、使う表現は限られているので、初歩の中国語で果敢に挑む。発音がダメでもみんながやっているように大声で怒鳴るとなんとかなるものだ。支払い現場はハイテクで、各窓口脇の端末でスマホ決済だ。価格は安く五百円も使えばご馳走になる。

2021年、十年以上教壇に立っていたシドニーを離れ、中国は花の都、広州に移った。それ以来、こんな

異文化体験を日々楽しんでいたところ、フィールド・アイに寄稿を頼まれた。中国労働市場の専門ではないが、編集部で随想で構わないと言って頂いた。中国で働く日本人経済学者はまれで、みなさんご関心があるところかと考え、寄稿を承諾した。3回の連載とのことなので、初回は中国に来るに至った経緯、現在の所属先、そして待遇について書いてみたい。

もともと、博士取得後は少し外国で経験を積んだら日本に帰るつもりだった。有り難いことに「日本に帰ってきませんか」と連絡を頂くこともちょくちょくあったのだが、妻も自分もシドニーという街に居心地の良さを感じずると歳月が過ぎ、「遠からぬ将来帰りますが、来年はちょっと」という返事を延々と繰り返すカエルカエル詐欺状態になっていた。2019年になり、当時の勤務先シドニー工科大学(UTS)で、もう少し勤めると12カ月のサバティカルに応募できるところまで来たので、一年間ヨーロッパにでも行って、それから日本に帰るか、と腹をくくったところでコロナになってしまった。オーストラリアの主要大学は国立ながら、留学生に高い学費を課してそれを原資に授業負担を軽くして海外から教員を呼び集める、というビジネスモデルだ。準トップである我らがUTSは見事にコロナ禍の直撃を受け、人員削減、新規採用凍結、授業負担増加という荒波に揉まれることに。サバティカルも最大半年、国内のみ、資金補助なし、との通達が来た。妻も私もヨーロッパ行きを楽しみにしていたし、子ども達に世界を見せたいという希望も強かったのでこれには意気消沈した。ただ、このお達しが来る前に、コロナが猛威を振るうヨーロッパは避け、当時、比較的安全であったアジアで半年か一年か訪問できる場所はないか、とコンタクトを取り始めていたところだった。そこから、UTSは休職して短期の有給のポジションをとれないか、などという話も何か所かとしていく中で、常勤で是非来て欲しいと言ってくれて話がトントン拍子に進んだのが今の勤務先になる、暨南大学・経済与社会研究院(IESR)だった。

暨南大学は、上海の復旦大学の知り合いが間を取り持ってくれたのが縁だったのだが、聞いたことがなかったのが不安もあった。調べたが、政府教育部が定める「一流大学」には入っていない。100校超が選ばれた「重点大学」のリストに入っている位だ。中国には全日制的普通の大学が2017年時点で2631校ほど

あり、日本は四年制の大学が781校とのことなので、単純換算で日本のトップ30相当と頼りない。しかし、周囲の中国人に聞くとすぶる評判が良い。わかったのは、話を頂いたIESRは、上海財経大学のシニアの労働経済学者が移ってきて2015年に立ち上げた新しい研究所で、急速にランキングを上げてきている、ということだった。中国ではまだ新分野であるマイクロ実証に重点を置いていて、マイクロ実証では中国一位という人もいるくらいだ。かなり前向きに誘ってくれるだけあって、待遇は良さそうである。シンガポール・香港・上海・北京の大学もつてをあたりをあたっていたが、色よい返事がなかったり、待遇・環境が見劣りしたりしたのでIESR一本に絞って熟考した。

周知の通り、中国の研究水準は近年飛躍的に向上しており、国家予算からの大規模な投資もあり、大学ランキングや論文の引用数などさまざまな指標で日本をとくに追い越してしまった。自然科学分野ほどでないにせよ、経済学も着実に伸びていて、自分が編集委員を務める国際学術誌でも中国からの投稿は激増している。経済学で中国に就職している日本人は皆無に近く、パイオニアの一人になって実態を自分の目で見て肌で感じてくれるというのは魅力的に思えた。NYU上海からソウル大に移られた奥井亮先生（現東大）にはかなり突っ込んだところまで相談に乗って頂いた。悩んだが、人生で大きな冒険をできる機会などそうそうない、と考え気持ちを固めた。子ども達に世界を見せたいという気持ちも強かった。

今回の暨南大学でのパッケージについて書いてみよう。個人的かつ下衆な話になるので迷いもあったが、今後就職を考える人の参考になろう。香港科技大の川口康平先生も以前、ご自身の給与水準を日本と比較し公開されていた。日中の大学環境の比較に一石を投じる意義もあろうかと思う。

数字を正しく理解してもらうために私の経歴に少し触れておこう。2007年に米国でPhDを取得後、2021年までシドニーで教鞭を執った。業績的には俗にいうトップフィールドへの掲載がほぼあり、それに次ぐ雑誌に複数載せている、という程度でスターなどでは全くない。経済学では五大誌というのがあり、世界中で五大誌掲載には給与インセンティブをつける

いったことが広く行われており、オーストラリアでも五大誌に掲載すると人生が変わるぞ、などと散々発破をかけられていた。それがどういいうわけか、2021～22年にある五大誌からR&Rを2つ連発で頂くという盆暮れ一緒に来たような状況になったのだが、散々エネルギーを取られた末にどちらもおじゃんになってしまった。CV的にはキャリアの最高潮からどん底へと急降下、ジェットコースターのような時期になった。研究の質やスタイルとしては淡々と似たようなことを続けているだけなのだが、なかなかストレスの大きい稼業である。若手の方で大変な思いをされている人も多いと思うが、私のように見事にこけてもなんとか生き残れるものなので、思うように行かなくとも地道に良い研究を続けていって欲しいと思う。

話がそれだが、IESRからオファーをもらった時点で自分はUTSの准教授、CVはほぼほぼだが五大誌のR&Rが1つある、という状況だった。広くジョブマーケットに出たわけではなく少数の学部と話をした程度だ。IESRでジョブセミナーをやって簡単な交渉の末に頂いたのは、テニユア付き教授。形式上は5年契約で問題がなければ更新という形。年俸は100万円。五大誌掲載が決まったら20%昇給（実現せず）。授業は最初3年は年間1科目（対面時間は1科目30時間）、その後は2～3科目。スタートアップ研究費が25万円。他にも大学負担の年金積み立てなどがあり、トータルでシドニーの准教授時代から微増という感じだった。ただ生活費は広州の方が相当安く、食費も住居費も安いので生活水準は上がる（あるいは貯金が可能）。上海の某大学からはオファーは出せるが給与水準はもう少し低くなるといわれた。香港の友人達の話では、香港は給与水準は高くなるが、住居費や子どもの教育費など生活費が相当高く、本土の方が高い生活の質を享受できるのではとのことだった。

まるやま・しこう 2007年にノースウェスタン大学にてPh.D.（経済学）取得。オーストラリアでの教職を経て、2021年より暨南大学（キナンダイガク、Jinan University）経済与社会研究院（IESR）教授。最近の主な論文に“Why Are Women Slimmer Than Men in Developed Countries?”（2018年）。専門は医療・健康経済学、人口経済学を中心とする応用マイクロ経済学。